動労千葉を支援する会ニュース

2024.4.15
３９２

動労千葉を支援する会事務局
千葉市中央区要町２－８ ＤＣ会館
TEL Fax ０４３（２０２）７８２０
メールアドレス info@doro-shien.site
〒口座番号 ００１５０－３－９２０３６

新たな飛躍へ 結成45周年レセプション開催

４月６日、動労千葉結成45周年記念レセプションが１２０名の参加で開催された。

主催者あいさつで関委員長は、動労本部からの分離・独立、国鉄分割・民営化攻撃との闘い、ＪＲ体制下での全面外注化攻撃との闘い、国際連帯の発展を述べ、「労働運動の再生をかちとるためにも、11月労働者集会の昨年を越える成功をかちとろう。本日の45周年レセプションを新しい飛躍をかちとるための出発点にしよう」と訴えた。

来賓挨拶を、三里塚反対同盟の萩原さん、改憲・戦争阻止！大行進呼びかけ人の高山さん、国鉄闘争全国運動呼びかけ人の金元重さんからいただき、永田ＯＢ会長と佐藤家族会会長の乾杯。ビデオが上映された後に、「歴史を語る」として動労千葉元副委員長の山口敏雄さんが発言した。

来賓挨拶では、顧問弁護団の藤田さん、関生の武谷さん、久留里線と地域を守る会代表の三浦さん、ス労自主の山川さん、社民党千葉県連の工藤委員長、新社会党千葉県本部の鳰川書記長、支援する会の山本事務局長、織田事務局次長から発言をいただいた。

つづいて、多年にわたり動労千葉役員として献身的に努力し、組合の発展に寄与した功績を讃え、大竹さん、相馬さん、高澤さんに対して組合表彰が行われ、16名の組合員に対して特別表彰が行われた。

そして、新たな出発に向けて、解雇者からの発言が行われ、中村副委員長をはじめ参加した解雇者全員からの発言が行われた。

最後に、お礼と閉会のあいさつを渡辺書記長が行い、関委員長の団結ガンバロー三唱で、動労千葉結成45周年レセプションは大成功のうちに終了した。

解雇者　発言

◆仲間を信頼し仲間を裏切らない
山口敏雄さん　元副委員長

4月8日で87歳になります。結成40周年の時、45周年はないだろうと思っていましたが、今日話ができることになりました。

79年3月30日結成の時に当時の関川委員長と中野書記長と一緒に、私も執行委員になりました。40周年の時にいた当時の執行委員の仲間も亡くなり、現在は私一人になりました。

当時、私は交渉部長で、国鉄が民営化になってストライキをやるにはどうするのか、私鉄の労組に、労働省や労働委員会への通知やスト権確立手続きなどを教わりました。

国鉄時代は記者会見を開き、「ストライキをやる」と勝手にやってきましたが、民営化以降はストをどうやるのか苦労したことが思い出にあります。

労働組合とは何か？「仲間を信頼し仲間を裏切らない」が基本だと思います。動労千葉は全国の闘う仲間と共に今後も歩み続けて行ってほしいと思います。

◆三浦久吉さん
久留里線と地域を守る会代表

45周年、もうそんなになったか、という気持ちです。

79年の結成前後、動労本部革マルが組織の切り崩しのために全支部オルグに来ました。組合一丸となって阻止行動を行い、内房、外房、総武本線の駅や電車の中でもみ合いになったりしながら、切り崩しを全部阻止しました。

会社の攻撃に率先して協力してきた今の革マルのみすぼらしい姿を見た時、私たちの闘いが正しかったと確信を深めていることです。久留里線の闘いも、それを引き継ぐものとして進めていきます。

久留里線はじめ全国各地で、公共交通の国鉄を民営化した国が、廃線にするかどうかを沿線住民と話を進めることなど絶対に許せません。地方を切り捨て、戦争に向かって国の予算を全部そこにつぎ込むそうです。踏ん張らないと戦争になるのではと危機感をもって、闘いをやっていきたいと思います。

◆桜沢明美さん　（千葉転支部）

45年間は、動労千葉の組織破壊攻撃との闘いでした。勝浦、館山、成田と拠点職場が全部廃止され、動労千葉をつぶすという1点で攻撃がかけられてきました。久留里線廃止も動労千葉潰しが目的です。「動労千葉は異常なほどしつこい」と言われてきました。しつこく久留里線廃止攻撃を粉砕するまで闘います。

◆綾部光男さん（津田沼支部）

勝利の核心は、動労千葉・総連合を軸にOB会、家族会、共に闘う仲間があったからです。労働運動の低迷状況に立ち向かった45年間だったと思います。今回の動労千葉48時間スト、水戸や高崎、西日本での決起は大きな闘いの渦を作り出しました。仲間を信じ団結したからできたと思います。

◆永田雅章さん　（千葉転支部）

動労千葉は明るく闘ってきました。「顔で笑って腹で泣く」。これが45年の

組合人生でした。今年7月で80歳になります。頑張りますのでよろしく。

◆高石正博さん（津田沼支部）

72年船橋事故の時、当時若かったので辞めるか闘うか踏ん切りがつかなかったが、中野顧問に「我々が生き抜くためにはこの闘いが必要なんだ。苦しいほうに向かっていけ。楽な方に行くな」と言われました。僕を応援してくれた人たちが動労千葉の執行部になり、この人たちに助けられて頑張ってきました。１０４７闘争が決着するまで頑張ります。

◆高橋邦彦さん（津田沼支部）

今日の動労千葉があるのはジェット燃料輸送阻止支援共闘があったからです。革マルとの闘いでもいつも先頭で闘ってくれました。館山支部からの急報を受けて、動労本部オルグ団が向かっていることに対する抗議行動で列車が止まるような大騒ぎになったこともありました。この時も支援共闘が一緒に闘ってくれました。私は支援共闘なしに今日を迎えられなかったと一言申し上げてお礼にかえたい。

椿　勇さん（津田沼支部）

ここに呼ばれるのはそれなりの理由があるからだと思います。ありがとうございます。まだまだ頑張ります。動労千葉頑張れ！

来賓挨拶

（一部紹介します）

◆萩原富夫さん（反対同盟）

三里塚ジェット闘争で労農連帯を貫き分離・独立し、車の両輪として闘ってくれた動労千葉のみなさんに感謝します。反対同盟も結成58周年、今後も共に闘い続ける決意です。

◆高山俊吉さん（改憲・戦争阻止大行進）

私は、動労千葉の労働学校の講師に呼ばれたのがご縁の始まりでした。先日、青年法律家協会結成70周年レセプションがあり、私が乾杯の音頭をやらされました。何とも言いようがないものがあり、関委員長や田中顧問が動労や国労の席で乾杯をやらされるようなものです。会場からは拍手され、涙を流して駆け寄る人もいました。様々な既存の組織の中に、今大きな分岐が起きている。私たちは勝利の道を堂々と進んでいることを実感しました。共に頑張りましょう。

◆金元重さん（国鉄闘争全国運動）

動労千葉との縁の始まりは、20年前の韓国民主労総との国際連帯が始まったころです。国際労研で私の講演に参加していた動労千葉の関係者が、韓国との国際連帯を考えているので、労働学校の講師にと頼まれました。動労千葉と聞いて、最初はビクッとした。それから毎年の民主労総との交流で通訳をやり、動労千葉から見た民主労総、民主労総から見た動労千葉を学ぶ機会を得たことは非常に良かったと思っています。

◆武谷新吾さん（関生支部）

三労組共闘との話し合いで千葉に来た時、電車の掲示板に「動労千葉のストで運行に影響」とあるのを見て驚いたことを思い出します。動労千葉と関生支部と共通しているものがあります。動労千葉の安全闘争、関生のコンプライアンス闘争です。この闘いで動労千葉も処分され、関生も弾圧され湯川委員長は実刑４年だと言われています。

兄弟分ということを改めて確認しました。昌一金属の組合つぶし、8・6広島反戦デモ弾圧。11月集会の大結集で落とし前をつけましょう。

組合表彰

多年　動労千葉役員　献身的努力、組合発展寄与　功績讃名表彰。

◆大竹哲治さん（千葉機関区支部）

私は、仙台組で電車運転士になるつもりでしたが千葉に戻った新小岩機関区で貨物運転士に。「出世するから」と言われ、支部執行委員のサークル担当になり、結局は本部執行委員に「出世」してしまいました。

亡くなった後藤俊哉君、中村仁君も同じ仙台組で、分割民営化反対ストで同期が解雇されたことで、組合活動を続けていくことになりました。中村仁君も解雇撤回まであと一歩と言っているし、私も、もう一歩、闘っていきます。

◆相馬正利さん（津田沼支部）

（85年　第一波　時　破拒否　国労　動労千葉。96年現在　津田沼支部長　担）

動労千葉の椿さんにスト破りだけは辞めてほしいと言われ国労から来ました。当時26歳でスト破りをやって、55歳定年でスト破りとして生きるのか、闘う道を選ぶのか、人生の分岐点でした。当時私は85年11月10日に結婚式をあげ、17日に新婚旅行から帰ってきて、10日後に11・28－29第一波ストです。女房のお腹には5カ月の子供がいて、悩みました。だけどスト破りで生きていくのは無理だと思い動労千葉に入って生きていくことに。親父は首になったらどうするんだと言われましたが、宅急便でもタクシードライバでもやって、女房子供は食わせていくからと、この道を選んだことは正解だったと思っています。今こうやって大先輩たちの前で話すことができることに感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。

◆高澤成夫さん（千葉運転区支部）

（90年　月　破　拒否　国労　動労千葉　結集　年　昨年　長　支部長　務　）

90年3月に国労から変わったのですが、国労にいたときから中村栄一君らと中野顧問と一緒に飲んでいたのですが、その時中野顧問は「お前ら絶対に国労をやめるな。お前らが国労変えていくんだ」と言われました。国労青年部で組合に不満はありましたが、１９９０年3月のストは、中村仁君らが清算事業団から解雇されることに対するストだったのです。

ＪＲ不採用で首になり、事業団解散でまた首を切られる。私は休日勤務の業務命令が出ました。それは絶対できなかった。中村仁君とは同期ですし、分民反対ストで首になった先輩がいっぱいいました。国労だから許されるものではない。国労も事業団解雇は反対だと言っていたので、千葉地本に行って中村栄一君と朝まで指名ストを入れろと要求したが、国労の方針ではないと。悔しくて栄一君と一緒に国労を抜けて動労千葉に来ました。

それから、多くの仲間が売店や駅に飛ばされ、それもあり最後まで頑張ろうと、それから40年間、千葉転で頑張ってきました。今後も多くの先輩たちと付き合っていきたいと思います。

結成45周年 動労千葉 歩 道 切 開 地平

（日刊動労千葉No.9398）

1979年3月動労千葉結成

動労千葉は今年3月30日、動労本部から分離・独立し新組合を結成してから45年を迎える。激しい攻撃に抗して団結を守りぬいた確信を胸に新たな一歩を踏み出そう！

結成の直接のきっかけとなったのは、動労千葉が首をかけて労農連帯を貫き、ジェット燃料貨車輸送阻止闘争に立ち上がったことに対する動労本部・革マルの敵対であった。動労本部は、「三里塚闘争とは一線を画する」と称して、国鉄当局や国家権力と一体となって闘いを中止せよと襲いかかってきたのだ。

それを「決定」した前年秋の津山全国大会は、千葉の代議員・傍聴者の多くが骨折等の重傷を負う激しい暴力の場となった。そして3月30日、千葉地本執行部の処分を決定するための中央委員会が召集された。それまでも千葉地本は、激論の中で73年に闘う執行体制を確立して以降、何年にもわたる組織破壊攻撃に耐え、我慢に我慢を重ねて“動労改革”を訴えて闘い続けていたが、事ここに至って選択肢はひとつしかなかった。千葉地本は同日、臨時大会を召集し中央委員会の推移を固唾を飲んで見守った。そして「統制処分を決定」との報と同時に、臨時大会は動労千葉結成大会に切り替えられた。45年前のこの日、こうして動労千葉は産声をあげたのである。

労働運動の変質に抗して

こうした事態の背後で進んでいたのは、動労や日本労働運動の急速な変質であった。当時、われわれはそのことを声をからして訴えていたが、労働運動全体としてはそう認識されていたわけではない。マル生攻撃を粉砕した国鉄の職場では一見労働組合が天下をとったかのような状況があり、国鉄当局は「労使関係正常化」と称して組合をチヤホヤしまくっていたし、戦後の争議件数のピークは74年で960件を数え、この年の春闘では30％を越える賃上げをかちとっている。国鉄を全線区8日間にわたってストップさせたスト権ストが闘われたのは75年だ。

1973年千葉気動車区

しかし、こうした見かけの華々しさの裏で実は労働運動の変質・階級性の崩壊が急速に進んでいたのだ。

60年代を通して民間大手の労働組合のほとんどが資本の側にのっ取られてしまっていたし、公労協でも組合幹部、激しく進む合理化を見て見ぬ振りをして賃金が上がっているだけなのに、それを運動の前進かのように語って慢心し、ストは「年中行事」でしかなくなっていた。

それは、74～75年恐慌以降の情勢の中で、総評労働運動が生命力を最後的に失って自壊しようとしていることを示す事態であった。

本質的な問題提起

72年から始まる船橋事故闘争、77年からのジェット燃料闘争、そして分離・独立は、日本労働運動を覆っていたこんな現状を労働組合側からぶっ壊す鮮明な決起であり、「労働運動はいかにあるべきか」を問う衝撃的な問題提起でもあった。

動労千葉結成の2年後（81年）には第二臨調の発足という形で国鉄分割・民営化攻撃が始まり、動労は民営化と首切りの手先に転落していき、丁度10年後には総評が自ら解散していったことを考えれば、われわれの決断は全く正しいものであったことをあらためて確認することができる。

しかしそれが一単組における組合分裂というだけでなく、日本労働運動に対する本質的な問題提起であったが故に、集中砲火のような攻撃がかけられた。ジェット闘争への5名の解雇、組織破壊をめぐる攻防への布施副委員長の解雇、国鉄分割・民営化攻撃に対する28名の解雇と12名のJR不採用、外注化阻止闘争に対する33名の解雇、成田・勝浦・館山運転区、佐倉・新小岩機関区等拠点職場への廃止・解体攻撃、相次ぐスト損賠攻撃、配転に次ぐ配転の嵐等、われわれはこの45年、常に激しい攻撃の嵐の中にあったが、数々の修羅場を潜ってきたわれわれの団結、組合員の強い信頼関係は揺らぐことはなかった。

1981.3.6三里塚ジェット全面スト（津田沼）

日本労働運動の新たな地平

とくに、反合・運転保安闘争路線の確立、国鉄分割・民営化反対闘争ー2波のストライキへの決起、1999年以来続く外注化阻止闘争は、戦後日本労働運動がずっと抱え続けてきた限界をこえる新たな地平をきり開く闘いであったと確信をもって訴えることができる。「闘えば分裂する」という「宿命論」をこえることができず、「要求で団結」「統一と団結」の名の下に、労働組合を経済主義の檻の中に閉じこめ、そして自ら崩壊していったのが戦後日本労働運動が辿（たど）った道であった。

さらに動労千葉は、反戦闘争を労働組合の本質的な課題とし、その闘いの中から画期的な国際連帯闘争を生み出し、そして何よりも、ほとんどの勢力が階級的な運動をつくりあげる努力を放棄していった状況の中で11月労働者集会をはじめ小なりといえど、労働運動再生に向けた全国的な運動の拠点を守りぬいてきた。

戦争情勢に抗して

そうした闘いを担いぬいた組合員は、どこの組合とも変わらないごく普通の労働者だ。労働者が固く団結すれば、少なくともこのぐらいのことはできる。だから労働者の団結した闘いには無限の可能性がある。それを示すことができたのがわれわれの誇りである。

成長の余地を失った資本主義体制の危機が戦争となって爆発し、ヨーロッパを、中東を、アジアを、世界を呑み込もうとしている。これまでは抑え込まれてきた怒りの声が地鳴りのように響きはじめている。この間の動労千葉の努力や訴えが時代をとらえて団結を広げ、力を帯びる時代が到来しようとしている。結成の原点に返って闘い続けよう。